

# 日本と北海道の国際化を問う

「日本は便利な国だが、ここには夢が無い。ずっと住みたい、と思わない。」なぜ？

私が日本に暮らし始めてから間もなく7年が経つ。この7年間、私は数百人の中国人留学生、研究者、在職者などと日本の事について様々な面から議論を交わした。が、最終的な結論はいつも同じ。

現在、北海道の人々と中国の人々の交流を支えるための中国文化サロンや中国人の観光の受け入れと北海道の人々の観光送り出しのコンサルティングを行いながら、現場から見た日本、そして北海道の国際化について苦言を呈したい。

## 1 日本の平等主義は国際化の大敵

私は北海道に来て、最初の1年間は日本語学院で日本語を学び、2年目からは北海道大学の工学研究科で社会基盤工学を学んだ。日本語学院にはもともと奨学金制度がなかったので、当時奨学金などもらった事も無ければ、考えたことも無かった。しかし、国立大学である北海道大学には、様々な奨学金制度があり、私も1年間、その奨学金の御世話になったが、奨学金をくれた北海道大学（日本の奨学金制度）の制度には、不満があった。

それは、北海道大学のお金の使い

方があまりにも下手だったからだ。

つまり、奨学金には、分配の原則が無く、何に基づいて奨学金を決めているのか、我々（学生・留学生）には全くわからない。だから、奨学金をもらった人は、宝くじに当たったのと同じ様に「ラッキー！」と思うだけで、その奨学金の発給元の大学に感謝の気持ちなんて少しも感じない。



留学生時代に親友■漫天と

(有)北海道チャイナワーク 代表取締役

## 張 相律

text : ZHANG XIANGLU

い。反対に、奨学金をもらっていない学生は、なぜ私にはくれないんだ、と学校に大きな不満を抱いてしまうことになる。留学生の間には、奨学金について様々な噂さえあった。例

えば、奨学金は「指導教授の力」により決まる、「研究テーマ」により決まる、「成績」により決まる、「家庭の経済条件」により決まる、など等。結局私は3年間でそれらしい原則（こたえ）を見出せなかった。自分なりに考えた原則（こたえ）は、奨学金は自分の能力と関係なく、在学期間中に1回は当たるように順繰り、順繰りと平等に分配される、ということだ。そもそも、いつ、どのくらいの金額の奨学金が「当たる」か、自分で全くわからないものは、奨学金とは言えないのではないか。それなら、初めから留学生生活補助金として、留学生全員に均等に配った方が、皆に感謝され、好感ももたれる、と私は思う。

今までの平等主義に基づく奨学金では、日本政府がいくらお金を使っても、不満をかうだけである。

平等主義は国際化の妨げになっている。チャンスは平等に与え、その結果には適當の差を認めた方が、社

会は発展する。みんなが同じことを考え、みんなと同じ事をしようと思つたら、留学生は、本国内で十分であり、わざわざ日本まで留学には来ない。

アメリカの中国人留学生は、アメリカ本土で独立して、ベンチャー企業を立ち上げる人が多い。しかし、日本では非常に稀である。日本では外国人だけではなく、日本人でさえ企業を起こすのが難しいと言われている。その理由として1つには、平等主義から生まれた「税金制度」がある。日本ではみんなが平等になるために、利益を生む少数の人から税金をたくさん取って、利益を生まないう大勢の人にお金を使っている。この制度の中では、経営者にとって利益よりもリスクの方が大きい。投資に見合う利益が得られないだけでなく、せっかく利益が出て税金で持つていかれることを恐れて、経営者は、その利益を無駄遣いするか、または隠してしまう。日本がこの税金制度を見直さない限り、この国で企業を起こす外国人はきつと増えないだろう。増えたとしても、一時的にしか過ぎないだろう。

もう1つ挙げられるのは、賃金の

平等主義である。仕事ができる人とできない人が同じくらいの給料をもらっている。これは、後で触れる日本の平均生活レベルの許容範囲が狭いとの関係がある。税金だけではない。日本人は中流意識が強く、平等を好む。日本の生活には平均レベルがあり、そのレベルから上下の許容範囲は、非常に狭い。その許容範囲に入った生活を送ると、安心していられるが、その許容範囲から下に外れるとその生活はかなり大変であり、また逆に上に行こうとすると、それはとても容易なことではない。狭い生活許容範囲に慣れた日本人は、それに合う考え方、価値観が身につけているので、そのなかで結構幸せを感じて、満足しているかもしれないが、海外から来た人にとっては、大変である。自分の考え方、価値観などを変えない限り、その許容範囲の中で満足を得て、幸せになることがなかなかできない。だから、満足できない場所でも長く生活することはできないのだ。外国人が長く生活することができないから、ますます国際化も進まない。

英語が普及すると国際化が進むとは限らない。英語はあくまで「コミュ

ニケーションの道具であり、そのコミュニケーションの内容こそが、国際化に問われる問題である。北海道が真の国際化を図るには、包容力のある社会を作り上げることが必要である。包容力のある社会とは何か？ 貧しい人も、豊かな人も、学歴のある人も、学歴の無い人も、習慣が同じ人も、習慣が違う人も、宗教のある人も、宗教の無い人もそれぞれが各自の違う尺度で満足感を感じる事ができる社会である。しかし、平等主義の社会は、統一を図りたがる。統一と言つのは、違うものを排除することであり、包容力が低下することを意味する。だからこそ、北海道はまず違うものをたくさん取り入れるべきである。そうすれば、宗教が違う国の人、貧しい国の人、先進国の人、日本に來た全ての人が安心して生活することができるだろう。

あらゆる人々にチャンスは平等に与えながら、結果をもっと厳しく評価しあう社会こそが、国際化の中で生き抜く者を育てることになる。“Boys be ambitious”の精神を注入された北海道への期待は大きい。

## 2 北海道の観光資源と安い賃金は、国際化の最高の武器

北海道は、工業と物流の面で、他の地域より遅れている。しかし、北海道の豊富な観光資源、広くて安い土地、安い賃金は魅力的である。これらは北海道の国際化を進める最高の資源であり、武器でもある。まずは、豊富な観光資源と低コストを利用して、海外から観光客を呼び集める。しかし、観光客が多くなることと国際化になることは、一緒ではない。多くの観光客に北海道の魅力十分にアピールし、将来北海道に來て、生活してみたい、北海道に別荘を持ちたい、などという気持ちを持たせ、実際に北海道に來て、生活している外国人が増え始めてこそ、国際化が進む。また、観光客が増えれば、外国人向けの様々なサービス産業がはやる。例えば、デパート、民芸品、飲食、娯楽など。もちろん、そのサービスにも幅広いレベルが必要だ。今までのような、どこに行っても同じ様な観光施設、サービスでは駄目である。徹底的にコストを抑

えた実用のみを重視するサービスと付加価値を重視する高級志向のサービスが必要となる。また、さらに異国の文化を満喫できる施設と本国にいるような、ほっ、とできる施設も必要となる。札幌のススキノには、4,000軒余りの飲食店があるが、既存の観光パンフレットにはその存在だけが誇りの様に書かれているだけで、どこの国の人はこの店に行けば良いなど、一歩踏み込んだ情報は一つも無い。もしかしたら、外国人が安心して気軽に行ける店はないのではないかと首を傾げたくなる。

まず北海道が、補助金をつくり、日本のことをよく理解している外国人に観光サービス業に投資させる努力をするべきだと思う。その効果力は、とても大きい。外国人が経営する企業は、日本の企業と必ず違うものがある。例えば、私が経営している中国と北海道の観光コンサルティングでは、安い旅行と贅沢な旅行のメニューの質を二分化し、お客さんのニーズに沿った形で徹底したサービスを提供することになっている。そうすることで、中国人のお客さんが、北海道や日本人の知らない北海道の魅力を発見することになる。こ

のように、その違いがたくさん集まって、初めて北海道の観光サービスに深みと幅が生まれるのだ。その深みは、観光だけではなく、他の分野にも影響をもたらす。違う国の人が共存するようになるると各国の最新情報も、いち早く入手することができる。情報は物流につながり、やがて国際経済交流も盛んになる。北海道は真の国際化に向けて、進み始める。

### 3 出入り不自由は、日本の国際化を妨げる。

日本は外国人に対するビザの発給が厳しい。特に、中国、東南アジアなど発展途上国の人に対しては、一般の日本人が想像できないくらい、厳しい。北海道に留学に来て、研究と交流を深めているうちに、北海道が好きになり、北海道で発展を求めている人は数多い。しかし、大抵の人は、ビザの問題で苦勞する。つまり、北海道で会社を立ち上げたり、会社の規模を拡大しよう、と思っても滞在ビザが下りるかどうかの不安の中では、非常に難しい。日本の企業に就職している人も、同じである。いく

ら日本語が上手で、能力があっても、ビザが切れるまでに採用してくれる会社(企業)を見つけないければ、日本に居られなくなる。そうになると、慌てて勤め先を見つけれず、自分に合わない仕事でもビザのために働かなければならなくなる。日本にいる外国人は、目の前の滞在資格・期限に追われ、長いスパン(期間)でものを考えることができない状況にいる。つまり、来年本国に帰らなければならぬかも、と思っているから、新車も買わない、家も持たない、お金も使わない、のである。それでなくても生活が大変なのに、ますます生活が厳しくなり、日本人と比べて、徐々に劣等感を感じ始め、生活の希望と満足感を失う。多くの人はやがて日本を嫌いになり、日本から離れていく。

目覚しい発展を遂げている中国は、全世界に散らばる中国人留学生(元留学生も含む)を知識経済の駆動力としてインキュベータシステムの中に取り入れる壮大な国家戦略を進めている。中国各地には、国家ハテック産業開発区が形成されており、様々な優遇政策と補助金政策で元留学生投資家を呼び寄せている。この流れの中、日本に居る中国人留学生と元

留学生研究者らの中国戻りが激しくなっており、日本はせうかく育てた国際化に必要な人材を失いつつあるのだ。そしてさらに、もっと悲しいことは、日本で育った人材が日本に不満を持って、アメリカ、カナダなどに行ってしまうことである。日本に留学し、日本を好きになって、日本で事業を続けようと思う私は、非常に残念に思う。しかし、仕方が無いのだ。これは日本の制度に問題があるのだから、私は彼らを止めることはできない。

観光ビザの場合も同じである。この何年間で、観光ビザの発給が緩和されつつあるが、それでもまだ厳しい状況にある。不法滞在を防ぐためには仕方が無いと思うが、それをビザで解決するよりも法律を強化して解決した方がいい、と私は思う。また、不法滞在者が存在すると言ったことは、その人を雇っている日本の企業がある、ということだ。法律を強化することで、解決策は見つかるはずである。観光ビザを一日も早く緩和した方がいい。出入り不自由は、国際化を妨げ、統一化を強化するだけである。人が動けば、お金も動く、物も動く。これ無くして、国際化は難しい。



中国語を指導している現在